



なんでもねん

発行責任者 倉橋 忠



No.27

課題作文「弱っている母親をどうするか」をどう書くか

この歴史の授業の初めに「自分の命は歴史的な存在だ」と私は強調しました。そして、今回の「課題作文」では、歴史的な時代を舞台に、「命をどうやって守るのか」と直接的に問いかけました。

作文が書けなかった人は、授業中に私(倉橋)が問いかけた時に『自分ならどうするか』と考えを巡らせ、自問自答しながら学ぶことから始めてください。

1 今回の「課題作文」のポイント

(1) どうすれば、「課題作文」を書くことができるようになるのか

今回の「課題作文」のテーマは、自分なりの結論を書くことが出来れば良いというものではありませんでした。「命」にかかわることで、中学校1年生なりの「人道的な判断」が求められる課題だったからです。

たとえ、自分が苦しくても、身体的に弱っている人を「見殺しにする」結論を簡単に導くことをしてはなりません。結論を出すまでに、どのような苦悩があったのか、何を判断基準にしたのかで「作文の価値」が決まります。身体の弱っている時だからこそ、その人を守らなくてはならないはずで、弱っているから見捨てるという判断はありえないはずで、「自分が生きるために仕方ない」という理屈は、この課題の場面や条件では使えません。なぜなら、自分の命が危ういほどの差し迫った場面に直面していないし、家族全員が生き延びる方法を考える余裕があったからです。

さて、「課題作文」を書くためには、「題意」を理解し、自分の「考え(主張)」をまとめなければなりません。今回の課題にそって説明すると次のようになります。

- ① まず、「何が課題なのか」を明確にしておく必要があります。今回は、32歳になる体力の弱っている母親を、どうすれば越冬地に運ぶことができるかが重要課題です。共に生きるために克服しなければならない困難な課題(問題)を自分で発見し、解決方法を自分(縄文人)で開発したり発見することが求められています。
- ② 次に、課題の条件が、どのようなものかを確認しなければなりません。今回であれば、大人が母親を含めて5人、子どもが5人の家族構成です。子どもは5歳か4歳くらいの子が最年長で1人、3歳以下が2人以上と考えられます。そして、

移動距離の30kmは、^{けんじょうしゃ}健全者なら約8時間で歩ける距離です。子ども連れだと16時間^{ていと すいそく}程度だと推測できます。季節的には、寒さが^{きび}厳しくなるまでには2週間くらいの日数があるようです。つまり、準備のできる日数があり、^{さ せま}差し迫った^{ききてき}危機的な場面ではありません。残された時間をどう使うかが問題です。

③ そして、課題を解決しようとするときには、選択する方法によって起きる結果を考えなければなりません。それが最も大きな「論点」になります。特に、今回は何よりも大切な「命」がテーマです。どうすれば家族が生き残れるようになるのか。^{しんちょう}慎重に結論と解決方法を選択しなければなりません。

④ さらに、思いついた「解決法」が、その時代で現実的に行うことが可能な方法なのかを^{けんとう}具体的に検討します。歴史的な課題の場合は、その時代の文化的・技術的な可能性と限界や、人々の^{しんじょう}体力や心情などを考える必要があります。

今回であれば、自分の足で歩いて移動するときに、どうすれば^{いっしょ}一緒に行動できるかを説明します。たとえば、^{つえ}杖を用意したり、^{ぼう ひ ば}棒で引っ張るとか、^{たんか}担架を作り兄弟二人で持つ、あるいは^{しよいこ}背負子を作って子どもや母親を^{かつ}担ぐなどの方法です。

また、家族だけで解決が無理な場合には、むらの人に助けを求めることも^{けんとう}検討するべきでしょう。縄文時代の人々は協力し合うことで生きていましたから。

(2) 今回の「課題作文」と現代の私たちの課題

今回の「課題作文」に^{ひそ}潜んでいる^{かつとう}葛藤(ジレンマとも言う)は、自分が子どもたちの親の役割を果たしながら、^お老いた母親を自分は救えるのかということです。

君たちの最大の^{なんかん}難関は、自分がまだ子どもなのに、親の立場になって考えなければならないことでしょう。しかし、^{なんさい}何歳であろうと^{きき}危機は乗り越えなければなりません。

自然環境の変化による^{きき}生命の^{きき}危機を、人々の協力で乗り越えるべき場面は、^{こんにち}今日でも起こります。たとえば、先の東北地方の地震の際に発生した^{つなみ}津波では、中学生たちが小学生を安全な所まで^{ゆうどう}誘導して多くの生命が助かった事実があります。

文化的なことで家族生活が^{きき}危機に^{おちい}陥ることもあります。たとえば、^{おそ}少子高齢社会は人の生き方を^{おそ}襲っています。自分が親になってからではなく、成人する前から心の準備をしなければ間に合わないことです。縄文時代は^{たんめい}短命だから、^{ちえ}生き延びる知恵をつなぐことが課題でした。けれども、現代は^{ちようじゆ}長寿のために^{きき}危機が^{ちようきか}長期化します。親が100歳、子が70歳、^{まご}孫が40歳、ひ孫が10歳という家族が一般的になるでしょう。働けなくなった祖父母や親の暮らしを、孫や家族は守ることができるのでしょうか。

歴史が教えること、それは、危機が人を育て、人々の協力し合う組織を作ってきたことです。ぜひ、「親の立場」「大人の役割」を考えることができる中学生になってください。もし、君たちが縄文時代の人なら、あと1年か2年で、親になる年齢です。

2 「課題作文」の課題と採点基準

(1) 【作文の課題】 次の文をよく読んで、自分の意見を作文にして説明しなさい。

縄文時代の草創期(今から約12,000年前)のころ、鹿児島に住んでいた人々は、春から秋までは梶ノ原に住み、晩秋に移動して、冬から春までは掃除山に住んでいた。梶ノ原は山の北斜面にあり夏でも涼しく、掃除山は山の南斜面にあるので越冬地として都合が良かった。ただ、その間はおよそ30kmほどあり、移動するには険しい山道を歩く必要があった。

冬が近づいてきた晩秋のある日、2人の兄弟が妻や子どもたちと一緒に2家族10人で、梶ノ原から掃除山に移動しようとしていた。昨年冬には、兄弟の父親が掃除山で死んだので、そこで墓を作り葬った。その時、彼らの父親は30歳だった。今年、32歳になる母親が「私は体の調子も悪いし、体も思うように動かないので、お前たちの足手まといになるだけだよ。お前たちの家族だけで向こうの山に行っておくれ。私はここで残るから」と言う。兄弟はどうするか相談した。厳しい冬がすぐにやって来る。結論を出すしかない。

さて、もし君が、そのような状況におかれた兄弟の一人だったら、どんな結論を出しますか。当時(縄文時代草創期)の状況をふまえて、自分の考えることを説明する文章を書きなさい。

(2) 【採点基準】 結論と理由の説明の筋道が通っていること。

理由(根拠)の説明は、次の論点について触れていること。論点1つにつき2点を加えます。採点法は加点法。誤字脱字は減点しません。複数の文章が矛盾する場合は、初めの文章のみ加点し後の文は0点。あいまいな記述は1点。次の論点以外でも、根拠や内容が正しく、筋道が通っていれば加点します。

- ① 結論を明確に具体的に説明していること。たとえば、㊦母親を説得して掃除山まで一緒に行く(梶ノ原に留まれば弱っている母親を死に追いやるだけだと指摘していること)。㊧一緒に梶ノ原にとどまる(家族全員が死ぬ可能性が高いことを記述しつつ、家族全員が生き残れる方法を説明すること)。㊨食料や燃料のたぎぎを準備して母親だけを残して出発する(この場合は、弱っている母親を死に追いやる可能性が高まることを指摘していること)。など。
- ② 12,000年前は、未だ氷期であり、日陰になる土地の冬は凍りつく寒さだった。そのため、30kmの険しい山道を歩いて暖かい越冬地に移動することは生き延びる方法だったことと、梶ノ原に残ると死の危険度が高まることを説明できている。
- ③ 縄文時代の人々の寿命は、5歳の人で平均31歳くらいだったことを説明し、あるいは、14歳くらいで親になり、子どもを育て、生活を支える一家の中心になっていたことを説明して、自分が親の立場で母親のことを考えることができている。たとえば、

自分の幼い子どもたちを保護しつつ、^{としお}年老いた母親と一緒に移動することが可能な方法を考えて説明している。

ただし、^{へいきんよめい}平均余命から^{こじん}個人の^{しき}死期を^{すいてい}推定できるものではない。したがって、31歳だから死期が近づいていると判断するのは、平均余命の誤った使用法であることに注意すること。なお、課題の子どもたちはすべて5歳までの幼児である。

- ④ 縄文時代の人々は子どもの頃から、生きるための知識や技術を、親や兄弟から学びながら、1年中ずっと家族一緒に暮らしていた。家族のつながりはとても強い。家族を失うことは自分の体の一部を失う以上の苦しみだったことをふまえている。
- ⑤ 縄文時代の人々は台地の上にむらを作って、^{たが}互いに助けあいながら暮らしていたことをふまえて考えていること。

3 「答案」の^{けいこう}全体的な傾向

今回の期末試験の「課題作文」では7点以上(10点満点中)の人が56人いました。

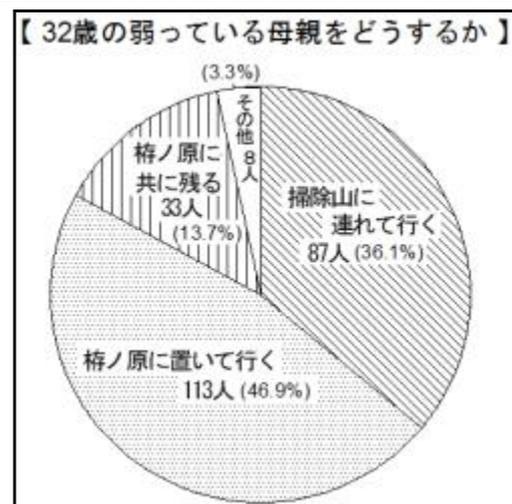
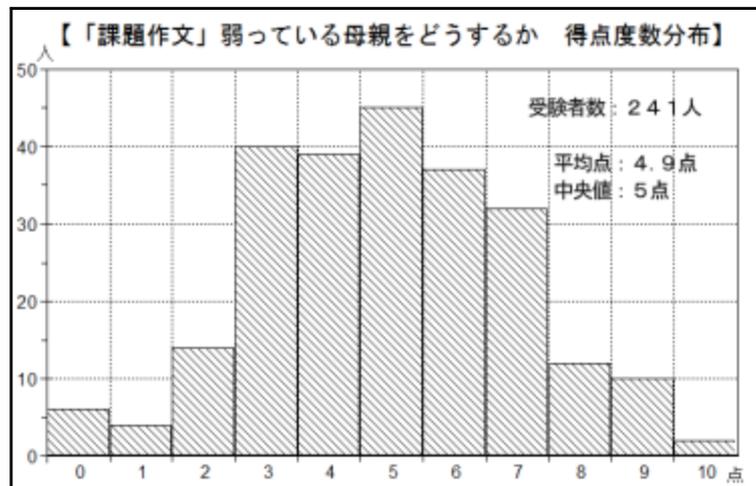
前回の中間試験では、7点以上の人が24人でしたから、2倍以上に増えたこととなります。自分の考えたプロセスや、意見を作文に表すことが出来るようになった人が増えています。

右の円グラフは、作文を結論別に分類した結果です。「母親を掃除山に連れて行く」は少なく87人(36.1%)です。最も多いのが「母親を柗ノ原に置いて行く」とした作文の113人(46.9%)でした。「柗ノ原に母親と共に残る」と主張する作文も33人(13.7%)いました。その他は8人(3.3%)です。

次の「4 友だちの作品から学ぼう」では、7点以上の「答案」の20人分を紹介します。結論は似ていても、結論を導き出した^{こんきょ}根拠は^{さまさま}様々です。みんな^{まよ}迷いながら自分の結論を選択しています。

ぜひ、「作者」の考えたこと、「苦しい思い」や「家族への思い」を読み取ってください。結論も大切ですが、それ以上に、結論に至る^{いた}プロセスの説明が重要です。

なお、「原文」のまま紹介していますので、文中の誤字・脱字は修正していません。注意して読んでください。「答案」の下(※寸評:)は、私(倉橋)のコメントです。



4 友だちの作品から学ぼう

(1) 「母親を掃除山に連れて行く」と主張する作文

Y.K. まず初めに、母と一緒に行動するか、しないかを考えます。そこで、私が調べた所、この時代の人々は、家族を大事にするといった特徴が見られたので、一緒に行動する方を選びます。次に、どのようにして、掃除山へ行くのかですが、これは4つの事がらを使って考えます。1つ目は、掃除山へ移動するのは、ここに出てくる10人だけではないということです。これは梶ノ原から出てくる石器の量で分かります。2つ目は、家族構成です。授業で習った事を使うと、母が32歳だと、子どもを15、6歳で産むということで、2人の兄弟は、17歳～15歳くらいです。その妻を、同じ年れいと考えると、その子どもは0～2歳くらいです。妻は、子どもの世話で手がいっぱいです。3つ目は、男の人は体力があるということです。狩りできたえられた体は、相当な物でしょう。4つ目は、この縄文時代は、平和で争いがなかったということです。これらを元に考えると、私なら、母をせおうのに、邪まな物を近所の人に持ってもらい、(お礼の品をわたします。)手があいた兄弟のうちの1人が、母をおぶって行く方法をとります。

(※寸評:縄文時代の人々の家族を大事にする心情を第一にすえて、難題を解決する方法を具体的に検討しています。しかも、近所の人に助けを借りることに視野が広がったことで、家族だけではとても困難に見えた難問を解決できると提案しています。とても現実的で、しかも幼児の存在とケアをしっかりと見極めた優れた作文に仕上がっています。)

S.N. 縄文時代は、協力、支え合い、足りない部分を補足し合う、などがなければ生き延びれないと思います。女性や子どもでも、木の実を採集したり、弓を使ったり落とし穴をつくったりして動物をつかまえたり、土器をつくったり、などできることが増え、家族のためになる仕事をしていたはずで。もちろん、問題に出てくる兄弟も、子どもたちも、妻も、母親もです。しかし、支え合いがなければ生き延びれないので、私だったら母親だけを梶ノ原においていくのはやめます。でも、もう少しで厳しい冬は来ます。母親1人で寒い梶ノ原で過ごす、大きい動物に食べられるかもしれないし、こごえ死ぬかもしれません。掃除山は暖かく、父親のお墓もあるので、行けたら母親は喜ぶはずで。遠くに石をとりに行ったり、移動手段は歩きだけの頃だし、1人では生きていけないし、掃除山には同じような道具もたくさんあるので、私が出す結論は、運んだりしてどうにかして母親も連れていきます。荷物を必要最低限にして、全員で父親の墓がある掃除山に行きます。そして、冬の内は風通しのよい夏用の家をつくり、1年中掃除山で過ごそうと思います。(定住のはじまりの時期でもあるから)

(※寸評:家族内での協力関係の強さを軸に考えて、困難を乗り越えようとする気持ちが伝わってきます。ただ、幼児の存在に視野が広がっていないことと、移動方法についての具体的な言及がないことが少し物足りません。)

M.N. 私は、掃除山へ、母親をつれていきます。母親自身が「ここで残る」と言っていたり、寿命のことを考えると、梶ノ原に残した方がいいと考える人が多いと思います。たしかに、本人の意思を尊長し、体の調子が悪ければ、30kmも歩くことができません。しかし、梶ノ原に残ることで、もっと大変なつらい思いをすすると思います。なぜ、30kmも歩いて移動するのかと考えた時に、自分の身を守るために移動をすすると思います。だから、自分の命を自ら捨てるのではなく、守る方が縄文人にとっても、いいと思います。また、どの時代でも、そうだと思いますが、今自分がいるのは、お母さんやお父さんがいるから今の

自分がいます。自分を育てて、技術を教えてくれたお母さんをそのまま柵ノ原に残すことになる、見すててしまうことになります。私は、そのようなことを絶対にしたくありません。だから、私は、自分の命を守ってもらうためにも、今まで育ててくれた感謝の気持ちもこめて、つれていくと思います。

(※寸評:この作文は、母親への感謝の気持ちを中心に、問題解決への姿勢を強調しています。柵ノ原に母親を残すことは「みすててしまうことになる」と断言して、反対意見に対して自分の意志の固さを示しています。ただ、残念なことに、この作文は、幼児の存在と移動方法を具体的に検討していません。せめて移動方法だけでも説明して欲しかったです。)

Y.M. 結論からいうと、母親をつれていく。なぜなら、かんたんの一つの命を無駄にしてはいけないと思ったからだ。

しかし、ゆっくりはこんでいると、冬がきて一家全滅するかもしれないので、道具を作ってはこぼなければならぬ。まず、木切れやつたなどをつかって、しよいこのようなものをつくったり、手押し車のようなものをつくり、のせてはこぶ。動物の毛皮などであたためながらはこぶ。けわしい山道だから、家族で協力しながら、つれていく。また、もし、亡くなってしまうたら、しかたがないが、置いていくしかない、家族の命が優先される。30kmの道のりなので、さきほど作った道具は最後の手だんだ。歩けるところまでは歩いてもらい、どうしようもなくなった時だけつかう。また、荷物はけずれるだけけずる。そうすることによって、はこぶときにはこぶ人のふたんがへる。

このような工夫をして、掃除山につれていく。最初にも書いたが、もうすぐ死ぬかもしれない人でも、最後まで あきらめずにできるかぎり命をつないでいかないといけないので、大変でも母親をつれていくべきだと思った。

(※寸評:この作文は、道具の工夫と、荷物の量的な限界を中心に移動方法を具体的に提案しています。しかしながら、この作文も、5人の子どもは幼児だということには、視野が及んでいません。条件をもう少し、ていねいに読み取ることができれば完成度が高まったでしょう。)

N.Y. 私は3つの結論があると考えます。

- ①家族全員で柵ノ原に定住する
- ②母をおいて掃除山に移動する
- ③母もつれた家族全員で掃除山に移動する

①では、冬の寒さをしのぐために掃除山に移動するのであって、冬のあいだも柵ノ原にいれば、寒さでこごえ死んだり飢え死にするかのう性が非常に高いので、家族全員でいるのは一家全滅するかもしれないので私はこの方法は考えません。

次に、②と③を3つの切り口から考えていきます。まず、上にも書いたように、柵ノ原にいたままだと寒さにこごえ死んでしまうかもしれないが、移動の事故で亡くなるということはないですむ。しかし、母もつれていった方が安心やし、いつだれが死んだかも分かると思います。2つ目は、父の墓が掃除山にあるということです。母も掃除山に行った方が父に会えるので嬉しいと思います。3つ目は母もつれていくと兄弟が15さいだとしたら子どもは乳幼児だと思えます。その子どもの面どうを見ながら母の面どうも見て移動しなければいけません。しかし、母をおいて行って母が死んで 移動中に子どもたちが死んでも 移動中に母と子どもが死んでも一都なので私は③と思います。あとは、移動中になにか事故が起こらないことをねがうだけです。

(※寸評:この作文は3つの結論があると仮定して、1つ1つをていねいに検討する手法で、自分の根拠と結論の正しさを説明しています。子どもたちが乳幼児であることも視野に入れています。しかしながら、具体的な方法論がなく、考え方の整理が中心でやや説得力の面ではやや弱いと言えます。なお、「一都」は「一緒」と書きたかったのでしょうか。残念です。)

Y.T. まず結論から言うと僕は迷う事なく母親を掃除山に連れて行くだろう。縄文時代草創期の人々の平均寿命は男女ともに30歳そこそこだった。もうすでに32歳の母親と北に30km更に険しい山道を移動するとなると足手まといになることも容易に想像できる。移動の途中で母親が力つきてしまうかもしれない。しかし、母親の言葉は息子を気づかっていた言葉であって母親の本心からきた言葉ではないだろう。人類がサルから進化した時点で人の最長寿命は120歳と分かっており、実際に長寿の縄文人だったのだ。今は体調が悪い母親も掃除山に行けば体調が回復し、もしかすると長寿の縄文人の1人だったかもしれない。母親が言ったとおりに母親をおいていく事はすなわち母親の死を意味する。僕にはその選択肢はない。

(※寸評:この作文は、平均寿命が個人の死期を推定するものではないことを明確にして、母親の体調が回復する可能性を視野に入れていますが。多く人の作文が、平均寿命を母親の死期に近いことの根拠にしているのとは全く異なります。「なんでやねん」をよく読んでくれることが分かります。)

M.T. 私がこの兄弟の1人だったら、母を掃除山に連れていく、という結論を出します。絶対に母を柵ノ原に残しません。なぜなら、柵ノ原に母を残すと、母に何が起こるか分からないからです。母を連れて行けば、足手まといになるかもしれないかもしれません。もしかしたら、掃除山に着いた頃には死んでしまっているかもしれないかもしれません。そうなったら、母を連れて行った意味がなくなります。でも、よく考えるとそんな考えには至らないと思います。今まで、自分に生き方を教えてくれたのは母です。今生きているのは母のおかげです。そんな母を、柵ノ原に残しておくことなんてできません。夏でも涼しい柵ノ原で、冬どう生活すれば生き延びることができるでしょうか。この時代は、衣服は決して厚くはなく、自分で体温調整もできません。食べ物も、冬なので多くはないでしょう。生き延びることなんてできません。もし母を残しておけば、母を自分の手で殺しているのと同じことだと思います。なので、私だったら母と一緒に掃除山へ行くという結論を出します。

(※寸評:この作文は、柵ノ原に母親を置いていくと、母親が生きていけないことを前提に、掃除山に移動することを考えています。子どもたちの年齢など家族構成の厳しさや、移動方法の工夫には触れていません。しかし、柵ノ原に留まる危険性を記述することで、自分の結論の正当性を説明できています。)

Y.M. 私がもし、この兄弟の1人だったら、母親も一緒に掃除山につれて行きます。しかし、最初は母親を残そうと考えていました。それは、この母親が当時の平均寿命をこして、体調も悪いので掃除山につれていったとしても柵ノ原に残していったとしても、どちらにしろ近いうちに死んでしまうため、わざわざ大変な思いをしてまで母親をつれて行く必要はないと思ったからです。しかし、柵ノ原で死ぬことと掃除山で死ぬことには、かなりの違いがあります。その違いとは、1人で死ぬか、みんなに見守られながら死ぬかという違いです。母親は、子どもに気を使って、「私はここに残る」と言っていますが、本当は、「最後まで一緒にいたい。」と思っているはずだし、兄弟側も、生きる知恵をたくさん教えてくれた母親をここに残すのは申しわけなく、ここで、現在よりも強かった「家族のつながり」をなくすことは悲しいという気持ちでいると思います。楽に行ける方よりも、母親や周りの兄弟の気持ちを優先し、母親も一緒に掃除山につれて行きます。

(※寸評:この作文は、自分の心の中で生じた葛藤を使って、他の考え方を説明しています。平均寿命を中心に考えていることも読み取れますが、「柵ノ原で死ぬことと掃除山で死ぬことは、かなりの違いがあります」と問題提起して、生きる意味を別の形で考えようとしています。そして、母親への感謝の気持ちが判断基準になったことを説明しています。)

A.B. 縄文時代草創期は、温度が徐々に上昇した時期です。魚や貝類、鹿やいのししなどの動物を得ることが出来るようになりました。木の実も得ることができるようになり、人々の生活が豊かになっていきました。そして、食べ物を竪穴住居で特定の場所で一時的に保存することができるようになりました。食料は土器に入れて保存することも可能になり、食料をたくわえることができるようになっていきました。

この時代は、今と比べると、衣服や住まいは今と比べものにならないくらい粗末なものでした。そして、今は衣服や住まいもちゃんとあるけれど昔はないので寒くなってくると移動しなければなりません。だから、ぼくは寒さから自分の身を守り、食料を確実にたくわえた食料を確保するために母と一緒に掃除山に向かいます。母を残すのも心配だし、なにかあっても逃げられないからです。そして、母と一緒に残るという手段は生きられない可能性があるから、ぼくは母と一緒に掃除山に向かうことにしました。

縄文時代というのは、環境に合わせて移動するということだと思います。だから、母と兄弟、家族で掃除山に向かいます。母を背負う係、食料などの荷物を持つ係、周りの状況を確認する係にそれぞれ役割を決めて移動します。食料をたくわえていた土器を父の墓前に置いて父の供養もします。

(※寸評:この作文は、草創期の様子をふまえて、掃除山に移動する理由をていねいに説明しながら、柵ノ原に留まる危険性を強調しています。移動途中の様子も説明できていますが、幼児をかかえている家族構成についての説明がないこと、むらの人との関係が登場としてこないことが残念です。)

Y.U. 私なら母を連れて掃除山に行きます。理由は、二つあります。まず、一つ目の理由は、当時は医りょうが発達していなかったので、残して行っても連れて行っても母は長くないと思います。なので、最期まで一緒にいたいからです。次に、二つ目の理由は、父が掃除山で亡くなり、墓が掃除山なので、同じ場所に葬ってあげたいからです。でも、これまで二つの理由を挙げて母を連れて行きたいと言いましたが、連れて行くと、母が言った通り、足手まといになるかもしれません。当時は集団生活をしていたので、周りの人たちに大きなめいわくも、かかると思います。掃除山に行くには、険しい山道を歩いて行かなければならないので、体の調子も悪く、体も思うように動かない母は、確かに足手まといになると思うし、より一層大変な移動になると思います。それでも、私は育ててくれた母を見捨てるわけにはいかないと思うし、最期まで一緒にいたいので、母を連れて行きます。

(※寸評:この作文は、母親への感謝の気持ちを軸にして考えています。その一方で、平均寿命と体調が悪いことを合わせて「母は長くない」と判断しているようです。そこで、父親と「同じ場所に葬ってあげたい」と表現していますが、平均寿命が個人の死期の推定根拠にはならないことを再確認しておいて欲しいと思います。なお、「集団生活」だから「大きなめいわくをかける」ではなく、「集団生活だから、むら人にも協力してもらえると考えると良かったでしょう。つまり、プラス思考でとらえると、少し見え方が変化すると思います。)

M.N. 平均寿命を超えた母親の決断を尊重するのか、自分の母親を見捨てるようなことなどできないと自分の決断を通すのか選ぶのが難しい2択にせまられて答えを出すのが厳しい問題だけれど私は母親を連れて30kmもある険しい山道を移動する方法をなんとしてでも考えます。縄文人は色々な道具を考え作り出していたので母親を運ぶための道具など役に立つ道具を作ることができたはずで、縄文人は自然の移り変わりに寄りそいながら家族や仲間と助け合い、力を合わせて暮らしてきたそうなので自分の母親を見捨てるようなことは絶対にできなかったと思います。

(※寸評:母親の決断を尊重するのか、自分の母親を見捨てないと思うのかと、対立する内容

を明確にしている点は評価できます。縄文人の家族への強い思いを基準に、母親を見捨てることは出来ないと結論づけていることも一貫しています。ただ、家族構成やむらの人との関わりに視野が広がっていないことが残念です。)

R.T. 私がこの家族の兄弟だったら母親を連れて行くと思う。

梶ノ原から掃除山まではおよそ30km。では30kmとはどのぐらいの距離だろうか？ インターネットで調べてみると私が住んでいる兵庫県の芦屋から、およそ大阪府の堺ぐらいまでの距離だと分かった。歩くと6時間ぐらいで、車だと30分ぐらいの距離だ。歩けなくはないだろう。

梶ノ原から掃除山までは山道だし、母親を担いでいくとなると少し時間はかかるかもしれないが、少なくとも1週間はかからない、はずだ。しかも2家族合わせて10人いる。みんなで協力すれば行けるはずだ。そして、今は晩秋だ。今でいう11月末～12月始めぐらいの時期のことだろう。最も寒くなる時期までは1ヵ月ほどあるのではないか。

もしも、母親を1人でおいていってしまうと、生活にも苦しくなるし、年令的に死ぬ可能性もあるが、冬になると寒さでほぼ確実に死ぬだろう。だが、連れて行ったら、少しは死ぬ可能性が低くなるのではないだろうか。このようなことから私が兄弟の1人だったら母親を連れて行くと考えました。

(※寸評:30kmがどれ位の距離なのかを調べた点は評価できます。そうなんです。決して歩けない距離ではありません。そして、この作文は、梶ノ原にとどまることの危険性を説明して、自分の結論の根拠にしています。行動可能な方法も提案していますが、家族構成の検討をしていないことが残念です。)

(2) 「母親を梶ノ原に置いて行く」と主張する作文

I.T. 結論から言うと母親は置いていきます。

なぜなら、この時、母親は32歳で平均寿命の31歳をもう越えています。また、この時、母親は体調が悪く、30kmもの山道を歩くのは、無理です。まだ、この頃は、薬もない時代なので、大人たちがおぶっていくしかありません。母親が長男である自分を14歳のころに産み、自分も14歳のころに子どもが出来たとすると、4歳以下の子どもが5人いることになります。4歳以下の子どもたちが30kmもの山道を歩くのは絶対無理なので、大人たちがおぶっていくしかありません。なので、母親をおぶれる人はいないということです。また、山の中は完全に危険となり合わせの場所です。そんな場所で、子どもたちと母親を守り抜くのは、不可能です。母親には、みんなのために木の実を食べて、どうか生きのびてほしいです。

(※寸評:この作文は、子どもたちが幼児であることを鋭く指摘しています。その一方で、平均寿命を超えた母親の死期が近いと言い、幼児を大人が背負うしか掃除山に行く方法がないと決めつけています。すべての条件が「母親を梶ノ原に置いて行く」ことの理由として使用されています。しかし、体力のある男性ならば、背に子どもを負い、二人で担架を持ち母親を担ぐことは可能であることを無視しています。さらに、むらの人々の協力を得れば、さほど無理をしないで母親を移動させることは可能になることにも気づいていません。「どうか生きのびてほしい」とあきらめる前に、あと、ひと工夫が欲しかった作文です。)

S.N. ぼくが兄弟の一人だったら、母はおいていきます。なぜなら、この子供が合計6人いる家族構成を可能にする条件は母と妻たち共に14、5歳で子供を産み、片方の妻だけでも4、5人の子供を産んでいることです。4、5人という数値は当時の子供は乳幼児のうち半数ぐらいも亡くなるという所からきています。そのかこくな時期と生き残った子供の中にはまだ幼い子どももいたと考えられ

ます。そうすれば、その幼い子供をおぶりつつ、越冬のための食料を持ち、他の子供の面倒も見なければなりません。ただでさえ この危険な状態で移動しなければならないのに ここに体の悪い母を連れていくとなるとさらに危険が増します。そもそも母を連れていくよゆうは無いと思います。また、多くの子孫を残すためには、子供を多く残す必要があります。家族間のきずなが強い縄文人からすれば辛いかもしれませんが以上の理由からぼくが兄弟の1人だったら母はおいていきます。

(※寸評:この作文も、家族構成を確認して対策を考えています。幼い子どもたちを保護すべきことは否定できません。ただ、一人の女性が生涯に産む子どもの数と、今回の家族構成とは直接の関係はありません。そして、幼い子どもを背負い移動することが、「母を連れて行くよゆうはない」と言い切れる理由になるのでしょうか。もともと縄文時代の暮らしは危険と背中合わせの暮らしです。家族の絆が強ければ、むしろ反対に一人も捨てることはできなかったと考えられませんか。むらの人達の協力をあおぐことも無理ですか?)

S.F. ぼくがその状態にたったのならば、かなりなやむと思う。母は「体ももたないし、子たちにめいわくをかけるぐらいなら」と思っている。実際、平均じゅみょうもこしている。もしかしたら、兄弟二人で、交たいしながら、おぶってつれていけるかもしれない。それは、父がいたら、可能だっただろう。しかし父はもういない。もし、15歳ぐらいで子供をうむとしたら子供は2歳ぐらいだ。2歳の子供が、30kmを歩けるとは思わない。しかもさむいなかだ。くすりもなく、病気をたいしょする方法は少ない。ましては、体のよわい母や子のこと。草創期に、母と子、どちらもとることは不可能といってもいいぐらいだ。もし、この時代に、寒さをしのぐ技術があったら残ることはできた。結果、たぶん、ぼくは、母をおいていくと思う。だいたいの人が30歳で死ぬ。自分たちの血をつなごうとすれば、子をつれていくしかないだろう。子を生んだ時てんで、親は、それまでの人生分しか生きれないのだから、子にとっても、とてもつらいことだ。親となったからには、まごといる時間はとても短いこととなる。それは、子を生んだからには、つぐなわなければいけないことだったのだ。とても悲しいことだが、この時代には、それしかなかったのだから、ぼくは、母をおいていくことにすると思う。

(※寸評:この作文は、かなり悩みながら、母親を柵ノ原に置いて行く決断をしています。根拠にしているのは、平均寿命を超えた年齢を死期と捉えていることです。しかしながら、これは誤りです。平均余命で死期を推定できません。あと少し、深く考えて欲しかったと思います。なお、この作文の良さは、自分が悩んだことをしっかり文章に表現できていることです。)

(3) 「母親と一緒に柵ノ原に残る」と主張する作文

A.S. 私が兄弟の一人だったらば、母と共に柵ノ原に残る。その理由はいくつかある。まず、石器の登場により毛皮を取ることができるようになった。毛皮をはぎ取り、衣服を作り、それに身を包めば、だいぶ寒さをしのぐことができる。また、縄文土器の誕生からわかるように、火を使うことができるようになった。そのため、火をおこせば、暖をとれる。このように、暖かさは何とかなる。しかし、食料はどうだろう。このころ、人々は、狩りをするだけでなく、採集ができるようになった。つまり、木の実が手に入った。木の実には保存することができる。そのため、穴も見つかり、土器もそのために使われることもあったようだ。なので、冬が来る前の秋のうちに木の実をたくさん取っておく。そして保存をすれば、冬の間木の実が採れなくても食料はあるというわけだ。私が柵ノ原に残ると考えた理由は、なによりも、これからどんどん「定住化」が進んでいく、ということにある。いままでは、季節や狩れる動物に応じて移動していたが、これから、できることが増えていき、定住化が進んだのではな

いだろうか。

(※寸評:衣食住の視点で検討して、柵ノ原に定住する可能性を論じています。しかしながら、草創期には残念ですが、人々は季節で移動生活していたようです。ただし、石器や火は旧石器時代から数万年も前から使われてきましたから、この作文のような表現は誤りということになります。土器を焼くのに火を使ったことに注目した点は評価できますが。)

M.Y. 私はそのまま柵ノ原に残るという決断をします。昨年には掃除山で父が死に、母親は体の調子も悪いなか、掃除山に行くのは危険だと思います。また、柵ノ原遺跡について調べてみると竪穴住居や炉穴などが発見されていました。つまり柵ノ原では定住化していた人たちがいたということが分かります。柵ノ原は山の北斜面にあります。なので夏は問題なく過ごせますが、問題は越冬です。そこで私が考える工夫は竪穴住居をもっと深く掘って温度調節をするという方法です。また、狩猟によってとれた動物などの毛皮をつくれれば少しでも寒さをしのげるはずで、そして、体の調子が悪い母を外で仕事をさせるのは良くないので、子供や近くに住んでいる人々が協力して食料を確保するのがまず一番重要だと私は思います。そのためにあらかじめ「集団」で行動し、近くに住む人とは良い関係を持つことが必要だと思います。このような理由からもし私が兄弟の一人だったら柵ノ原に残り、そこで定住生活をするという決断をします。

最後に、今の世界でも災害などが起こった時に近所の人達が協力して救助にあたりることがあるので、近所の人達とは顔見知りになり良い関係を持つ方が良いとされています。なので昔でも今でも「集団」で行動することはとても大切であるを学ぶことが出来ました。

(※寸評:柵ノ原遺跡の竪穴住居跡と掃除山遺跡の竪穴住居跡は瓜二つで、同じ家族が季節によって移り住んだ跡だと考えられています。柵ノ原で越冬するには相当の技術が必要だったのかも知れません。「むら集団」で定住するべきだとするのは無理があります。ただ、竪穴をより深く掘るという方法は、防寒対策として有効だった可能性はありますけどね。)

M.I. 私だったら、母と柵ノ原に残ります。理由は二つあります。まず、一つ目に、なぜ母を掃除山に連れていかないのかに対する理由です。それは、今年の冬、父が掃除山で亡くなっているからです。父は柵ノ原から掃除山までの距離30kmを移動する事できっと自分の寿命を縮めてしまったのだと思います。だから、父と同じように、無理に移動させるのは、母に対して良くないし、母の寿命を縮ませてしまうのです。この時代、交通手段が徒歩しか無かったので、移動が寿命を縮めるのは当たり前です。二つ目に、なぜ母を置いて移動しないのかに対する理由です。それは、生活の知恵をつきっきりで教えてくれた母への感謝を表すためです。寿命の短い縄文人は幼い頃から親に生活の知恵を教えこまれます。教えてもらう内に子は親と強い絆を育むと思うのです。だから、母を一人で死なせる訳にはなりません。木の実を必死で採集したり寒さを防ぐ為の家をつくったりして、寒い冬を母と共に乗り越えたいです。

(※寸評:父親が死んだ理由が30kmの移動とは限りません。狩りの途中での事故死だったかも知れません。柵ノ原に留まることは、寒さを考えると移動よりも危険かも知れません。徒歩しか移動手段がなかったから、身体が鍛えられ丈夫だったとも言えます。徒歩が寿命を縮めたとは言い切れないでしょう。)

M.F. まず、母を掃除山に連れていくか、自分達も柵ノ原に残るかとい事になるが、私は、母と共に柵ノ原に残ります。当時はもちろん、車や自転車などの移動手段がなく、歩くという方法しかありません。自分が30km歩くのでさえ大変なのに、母を連れていくというのは体力的に難しいと思います。実際に父も亡くなっているのです。かなり苦しいと思います。なので、私はどんぐりなどの木の実をまず、たくさん集めます。冬場なので食量も保存できると思うので、とにかくたくさん食量を蓄えます。しかし、それだけでは寒さに負けてしまいます。

そこで、多くの木材などを集めて、少しでも寒さにたえられるよう、家を補強します。できるだけ、寒さ対策をして、寒さから身を守れるように。もし、少し余ゆうがあるなら、動物の毛がわなどでなるべく暖かい冬をきたり、家の中で火をつけたりして、生活します。まず、第一に考える事は、母と自分が共に生き残れる方法を考えることです。自分だけ助かれば良いと思って、母を残したりしても、子供ができたりしたら誰から何を学べば良いのか分からず、自分も子供も死んでしまうでしょう。だから、なるべくたくさんの方が生き残れるように、又、自分の子孫の事も考える事が大切です。もし私が兄弟の1人なのであれば、今すぐ家を飛び出し、食量を探しに行きます。

(※寸評:「なるべくたくさんの方が生き残れるよう」と考え、子孫を残すことに注目した点に、この作文の特徴があります。しかし、柵ノ原に残る選択は、前提になっている「柵ノ原の冬の厳しさ」を無視しています。特に、幼児にとっては厳しい寒さは大敵だったはずで、また、父親が死んだ理由が30kmの移動とは限りません。狩りの途中での事故死だったかも知れません。なお、ここでは「食量」ではなく「食糧」です。)

(4) 「自分と母親だけ柵ノ原に残る」と主張する作文

Y.S. 私は、母親と自分が柵ノ原に残り、それ以外の家族に掃除山に行くよう伝えたいと思います。母親は、自分の体調を自分で理解し、30kmも離れた場所に行くのは難しいと決めたのです。そんな母は、この時代の平均寿命である30歳をこえ、いつ死んでもおかしくない状態です。でも、そんな母であっても、できるだけ長い間生きていてほしい。だけど30kmも離れたところに行くのは難しい。そうなったら、母は確実に今いる柵ノ原にとどまるしかありません。しかし1人で柵ノ原においておくと1人で生活できなくて死んでしまうかもしれません。であれば、私が残って、母の生活を助けてあげればいいのではないのでしょうか。そうすれば、母も今まで通りとまではいきませんが、今まで同じような生活をしていけるのではないのでしょうか。寒い冬がきますが、なにかいいアイデアはあるはずで、火をおこしたり、服を何枚もつくって重ねて着たりなど。家族たちは、いつも通りの健康で暮らしやすい生活を送ってもらうために掃除山に行ってもらいます。

私が兄弟の1人だったら、このような決断をしていたと思います。

(※寸評:家族みんなで柵ノ原にとどまると、家族全員が危険にさらされる可能性が高いと考えての結論と思われます。確かに、他の3人の大人が、5人の幼児を抱えて移動するのは、母親を運ぶより負担が少ないかも知れません。しかし、元気な人が母親と一緒にだと、母親が生きのびる可能性は高まると言えるのでしょうか。もともと、柵ノ原で越冬するのは困難だったと考えられるので、相当な工夫がないと二人とも危険かも知れません。

ただ、このアイデアは他の作文の考え方とは異なり、自分を犠牲にする覚悟を持たないと考えられないものです。そのために、かなりのリスク(危険性)を伴います。なぜなら、家族という集団で生きてきた形をくずして、一人で生活を支えることになるからです。かなりの無理があることを忘れてはならないでしょう。)

